牧場はるかに若駒あそぶ
にぎはしき村の祭の中過ぎて
悲しくなりぬ我がひとり旅
君がめでし白き桔梗をたむくれど
君もいはず墓のつめたき
一しきり百舌啼きたてゝ霜かれの
林の奥に日はかたふきぬ
長閑なる村の夕べや子は家に
鳥はねくらに家に烟の

瀧廉太郎の君の一週忌に

東くめ子

峯の松風　もろともに
妙なるしるべ　かなでつる
瀧のしら糸　たえはてゝ

名のみ殘るも　はかなしや
かたみの曲を　とりいてゝ
ピヤノによれば　たちまちに
くしくもひゞく　樂の音は
君かむかしの　しらべなり
きくにえたえぬ　わがこゝろ
ひく手も胸も　亂るゝに
ゆめかわらぬか　まはろしの
見ゆるぞうせし　友の面影

松島に遊びて紅蓮女がとを思ふ

小林雨峰

かつて芭蕉がみちのくの記に謠はれし松島の奇勝は、われの常に東北に遊ぶ毎に、神飛魂往せさ